

研究報告

父親がひきこもりの問題に向き合うプロセス

内藤 守¹⁾・斎藤まさ子¹⁾・本間恵美子²⁾・真壁あさみ¹⁾

1) 新潟青陵大学看護福祉心理学部看護学科

2) 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究科

Process by which Fathers Get to Grips with the Problem of Hikikomori

Mamoru Naito,¹⁾ Masako Saito,¹⁾ Emiko Honma,²⁾ Asami Makabe¹⁾

1) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY DEPARTMENT OF NURSING

2) NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY GRADUATE SCHOOL OF CLINICAL PSYCHOLOGY

要旨

本研究の目的は、ひきこもりの子を持つ父親が、ひきこもりの問題を認識し、向き合うプロセスを明らかにすることである。親の会に参加している父親7名に対し、半構造化面接を行い、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した。その結果、6個のカテゴリーが抽出された。プロセスの中で、ひきこもりの《問題の再構築》が重要なポイントであることが見出された。父親は《問題の深刻さの認識欠如》から、《家族関係の不協和》を繰り返しながら、《認識変化への条件整備》がなされていく中で様々な思考し、徐々に自己を含めた家族の問題として《問題の再構築》していく。そして、子ども・家族に対する理解の仕方の《視野の拡大》や《外向き行動の拡大》が起こる。《問題の再構築》は、また《視野の拡大》《外向き行動の拡大》していく過程で深められる。これらより父親への支援では、家族の問題としての再構築を早く確かなものとする必要があると示唆された。

キーワード

ひきこもり、父親、認識、再構築、プロセス

Abstract

The goal of this study is to clarify the process by which fathers of hikikomori children perceive the problem of hikikomori and get to grips with it. Seven fathers participating in the parents' group responded to semi-structured interviews and these interviews were analyzed using the modified version of the grounded theory approach. As a result, six categories were extracted. It was found that “reconstruction of the problem” of hikikomori was an important aspect of the process. Fathers repeatedly mentioned “lack of understanding of the seriousness of the problem” and “discord in family relations.” At the same time, in the process of “establishing the conditions for changing their perceptions” they thought about a lot of different things, and gradually arrived at a “reconstruction of the problem” as a family problem including themselves. What happened then was “broadening of perspective” and “expansion of outward-looking behavior” in terms of how they understood their child and their family. “Reconstruction of the problem” was intensified in the process of “broadening of perspective” and “expansion of outward-looking behavior. It seems from this that in the support given to fathers it is essential to position the hikikomori problem, early and firmly, as a family problem.

Key words

hikikomori, father, perception, reconstruction, process

I はじめに

2006年3月末日現在、わが国ではひきこもりの子どもがいる世帯は、26万世帯と推定されている¹⁾。また、境²⁾が2012年に発表したNPO法人引きこもりの親の会のメンバーを対象にした調査によると、ひきこもり本人の平均年齢は31.47歳、ひきこもり開始年齢は平均19.85歳、ひきこもりの平均期間は10.28年であった。その両親については、母親の平均年齢が、60.09歳、父親の平均年齢は64.29歳であり、両親の高齢化の問題が指摘されていた。2013年の境³⁾の報告では、ひきこもり本人の平均年齢は33.1歳、母親の平均年齢が61.8歳であり、父親では67.1歳と高齢化が目立っていた。本人の長期間のひきこもり、家族の高齢化からすると、家族の精神的負担は非常に大きなものであると推測される。

社会的ひきこもり青年を抱える家族の研究の中で、天谷⁴⁾らは、ひきこもりの問題は、本人への対応の困難さとともに、家族の不安や葛藤の問題であることを指摘している。また、斎藤⁵⁾は、ひきこもり事例の場合、家族の協力が得られなければ、その治療がほとんど完全に不可能であること、家族の協力がなくしては治療にならない、と家族の重要性について述べている。子どもと直接関わるのは母親であることが多いため、家族の不安・葛藤といった場合には、母親のことをさすことが多いが、斎藤は父親の無関心も問題であること、父親が熱心なケースほど治療も進展しやすいと指摘している。ひきこもりの子どもを抱える家族について考える場合には、母親はもとより父親のことも考えていくことが必要であると考えられる。障害児を抱える家族・母親については、母親メンタルヘルス⁶⁾、父親の育児行為に対する母親の認識、障害認識について父母の相違^{8), 9)}、など多数研究がなされている。また、父親についても、知的障害者の父親の意識について、高齢の父親の養育態度

と心情についてなど、さまざまに研究がなされている。しかし、ひきこもりの家族に関しては、家族支援について母親について¹²⁾、親の役割の重要性などあるもののその数は少なく、父親に関してはほとんど研究されていないのが現状である。

本研究は、まだ明らかになっていない、父親がどのようにひきこもりの問題を認識し、向き合うようになっていくのかそのプロセスについて考察するものである。

II 研究目的

本研究では、ひきこもりの子どもを抱える父親のひきこもりの問題に対する認識変化、問題に向き合っていくプロセスを明らかにすることを目的とした。

III 研究方法

1. 研究対象者

対象者は、北陸地区、九州地区のNPO法人「全国引きこもりKHJ親の会」で活動・参加しているひきこもりの子どもを持つ父親7名である。60歳代5人、70歳代1人、40歳代1人であった。ひきこもっている子どもはいずれも男性であり、ひきこもっている期間は、13年1人、14年3人、15年、18年、25年各1人であった。

2. 調査期間・調査概要

調査は、研究者が手分けをし、2011年10月から2012年3月にかけて、対象者の居住地に赴き、面接調査を実施した。面接時間は、1～2時間で半構造化面接を実施した。

3. 倫理的配慮

面接は、プライバシー確保のため個室を使用した。対象者に対しては、事前に、NPO法人代表者に研究の趣旨を説明し、研究対象者

に調査協力をお願いをして頂いた。対象者には、調査当日面接時に研究目的、参加の任意性、不参加による不利益がないこと、データは録音するが分析終了後直ちに消去すること、匿名性による個人情報の保護について、口頭・文書で説明し、同意書に署名を得た。

本研究は、研究者が所属する大学の倫理委員会の承認を得て実施した。

4. 分析方法

データの分析は、木下¹⁶⁾による修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下（M-GTA）を活用した。データの分析は、録音データを逐語録に起こし、それをもとに、テーマに関連ある箇所に着目し、それを一つの具体例として分析ワークシートに記載し、類似例を記入した。分析ワークシート毎に定義を考え、定義に基づいて概念を生成した。

その過程で浮かんだアイデア・疑問点を理論的メモとして記入した。データを継続的に比較分析し、カテゴリーを生成し、カテゴリーの妥当性を深めながら精密化していき、カテゴリー間の関連について考察し、結果図としてまとめた。

分析を進める段階（分析テーマの設定、概念の生成時ほか）で共同研究者間で意見を出し合いさらに分析を深めた。

IV 結果

M-GTAによる分析で生成し抽出された概念は〈 〉、カテゴリーは《 》で示し、父親の語りは「 」で表す。本研究で抽出された概念は17であり、それらの概念は6つにカテゴリー化できた。カテゴリーは、《問題の深刻さの認識欠如》《家族関係の不協和》《認識変化への条件整備》《問題の再構築》《視野の拡大》《外向き行動の拡大》であった。

最初にストーリー・ライン（図1）を示し、次に抽出されたカテゴリーを説明する。

1. ストーリー・ライン

父親は、〈仕事中心の生活〉を送っており、必然的に子どもとの関わりは少ない。そのことは、父親自身も〈関わり不足の自覚〉をしており、子どもへの対応は〈母親任せ〉で、父親は《問題の深刻さの認識欠如》の状態である。父親は母親に対し（〈自己主張の押し付け〉）といった行動をとるが、〈夫婦関係の更なる悪化〉となり、《家族関係の不協和》が生まれる。

このような状況の下、様々な出来事を経験する中で父親は〈状況がもたらす関わりの促進〉〈背中を押されて行動〉〈専門家のアドバイスの受け入れ〉〈連帯感の獲得〉〈第三者の援助に感謝〉など気持ち・行動が少しずつ変化し、ひきこもりの問題に対する（《認識変化への条件整備》）がなされる。そこで父親は、ひきこもりの問題を自分も含めた〈家族の問題として認識〉し、〈問題に向き合う覚悟〉を決め《問題の再構築》を図り始める。

それは、《視野の拡大》を起こさせ、〈子どもを見る視点の変化〉〈自己の態度の振り返り〉〈家族の気持ちの理解〉などが促進される。また、父親は家の中だけでなく外部に向けて〈積極的行動の開始〉や〈他家族への支援〉などを行い、《外向き行動の拡大》が起こる。それらにより問題の再構築も強化されていく。

2. 《問題の深刻さの認識欠如》

このカテゴリーは、3つの概念〈仕事中心の生活〉〈母親任せ〉〈関わり不足の自覚〉からなる。

〈仕事中心の生活〉は、父親自身が、子どもとの関わりを見つけれない原因のよりどころとなっている概念である。父親は「あんまりその（息子どもに）関わって無かったものですから、現役中だったものですからね」と語っているように、子どもがひきこもりに

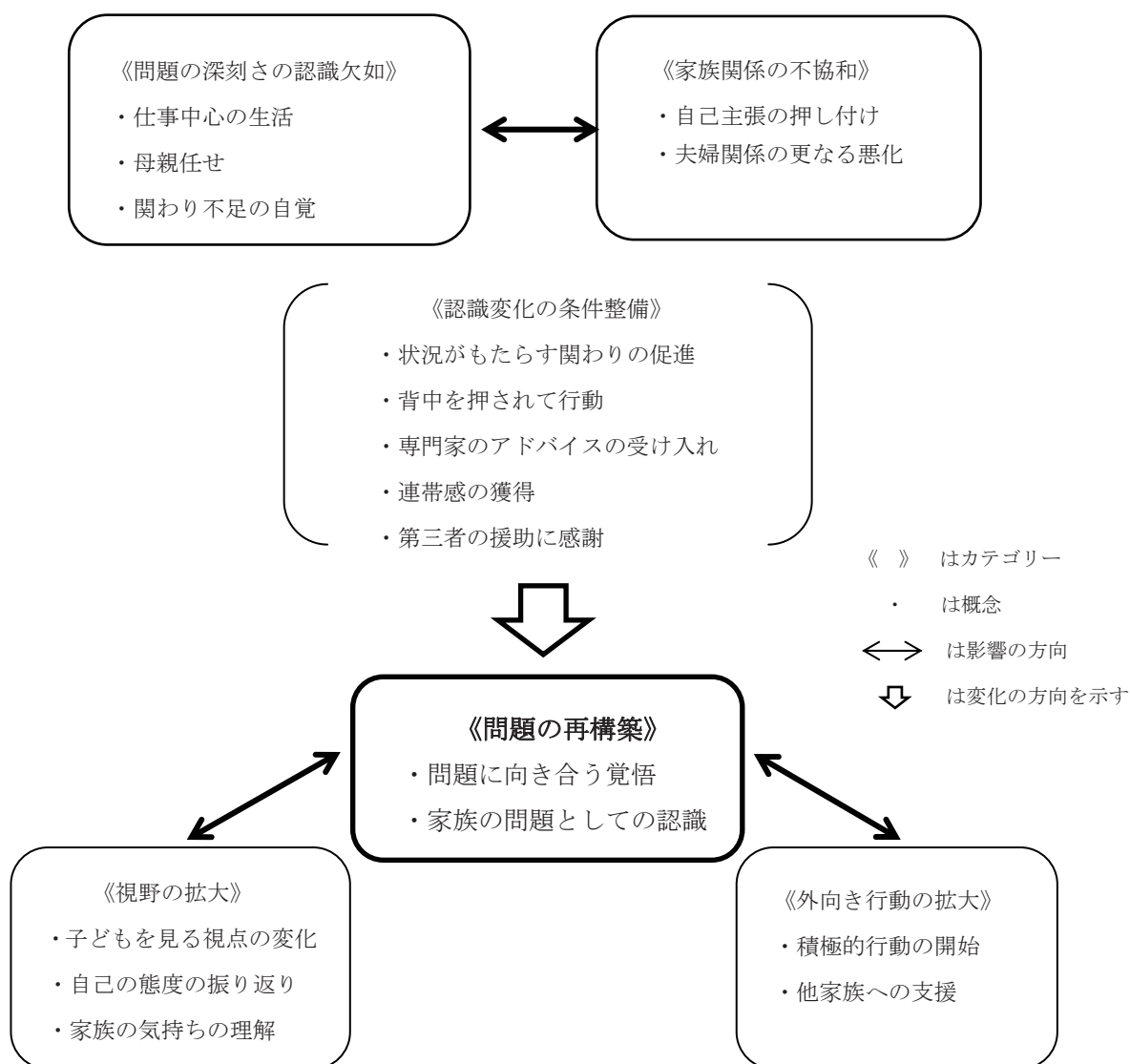


図1 父親がひきこもりの問題に向き合うプロセス

なっていくこの時期は、父親にとって仕事上（会社等で）中心的な役割を担っている時期、家計を支える中心となって働いている時期であり、子どものことに集中できる余裕がないことが見てとれる。

＜母親任せ＞は、父親は仕事中心の生活となり、必然的に父親の子どもに対する関わりは少なくなり、「ほとんど女房に任せきりだったもので」と語られているように、子への対応が母親任せになっていることを自ら納得している概念である。父親としての自分なりの役割を見出す一方、子どもへのかかわり

は母親の役割と自分なりに割り振っていた。

＜関わり不足の自覚＞は、父親自信＜母親任せ＞を漫然と肯定しているわけではなく、子どもとの関わり不足を自覚している状態を表す概念である。「子どもともあまり顔を合わせる事がなかったんですよね休みの日も、・・・それでほとんどなんか子どもと接触する機会がなかったんですよ。それでほとんど子どもの状態を全然見えてなかったんですけど、それでそんな状態でもうかけ離れてしまっていて、子どもをわかんなくて」と語られているように、自覚しながらも、どうし

ていいか分からず苦悩している状態が伺えた。

母親が、ひきこもりの子どもに向き合い、混乱している状態の中で進むべき方向性を探し求めているのに対し、父親は、子どもと向き合えず、向き合う糸口を見つけるのに苦労している状況であり、ひきこもりの問題の深刻さに気づいていない（《問題の深刻さの認識欠如》）。

3. 《家族関係の不協和》

このカテゴリーは、＜自己主張の押しつけ＞＜夫婦関係の更なる悪化＞の2つの概念からなる。

＜自己主張の押しつけ＞は、問題が一向に改善しないことに父親が、母親に対し自分の考えを主張することで、状況を何とか改善しようと試みている概念である。父親は、「私は、母親に対して、おまえのしつけが甘いから、甘やかすからこうなるんだ、と。」と語っていたが、父親の言葉は、状況を改善するための前向きなものというよりは、どうにもならない自己の感情を母親にぶつけているように感じられる。

＜夫婦関係の更なる悪化＞は、自己の考えを押し付けるというやり方は、状況を前向きに改善するどころか、夫婦関係をさらに悪化させる方向に向かわせていることを表す概念である。「夫婦別れしたかもしれないですし、子どもはもっとひどい状態になったのかなと思いますね。」と語られているように、それまで、子どもに対しての関わり方の意見の違いであつたりしたものが、家族として支えていく基盤となる夫婦関係にまで影響が及ぶようになっている。家族間関係が、より深刻になっている状態（《家族関係の不協和》）が見てとれる。

4. 《認識変化への条件整備》

このカテゴリーは、＜状況がもたらす関わ

りの促進＞＜背中を押されて行動＞＜専門家のアドバイスを受け入れ＞＜第三者の援助に感謝＞＜連帯感の獲得＞5つの概念からなる。このカテゴリーは、どんな要因が、父親の認識変化に影響を与えているか示すものである。

＜状況がもたらす関わりの促進＞は、それまで直接子どもに関わることが少なかった父親が、子どもの入院という状況に「これは、もうだめだと・・・入院させます」と必然的に関わらざるを得なくなったり、やむを得ず、子どもと関わらざるを得なくなる状況を表す概念である。

＜背中を押されて行動＞は、母親から「勉強してください。・・・ぼくは行くのはどうかと思っていたんだけど・・・あなた（会に）行ってきてって」など促され父親が、行動をせざるを得なくなる状況を表す概念である。

＜専門家のアドバイスを受け入れ＞は、医師・心理士など専門家から「父親も、入ってやらないとだめなんですよ」など指摘されて、アドバイスを受け入れていくことを表す概念である。ひきこもりについての情報が多くなかったことを考えると、専門家からのアドバイスは父親が行動を決意していく過程で大きな拠り所となっていた。

＜第三者の援助に感謝＞は、「親切にしてもらって・・・先生まで紹介していただいてね、大変ありがたかったと思っています」などのように他者から親切に声を掛けてもらえたことで、感謝をあらす概念である。ひきこもりという現象が一般的にまだ知られていなかった状況においては、第三者からの親切な言葉かけが心にどれだけ響いたかは、想像に難くない。

＜連帯感の獲得＞は、親の会へ参加することで「ここでは分かってもらえるって、そういうことですかね」など同じ立場の人がいることで連帯感をもてることを表す概念であ

る。対極例として、「（親の会で）楽になることはないです。かえって、どちらかと言うと、辛いことを思い出す…」など状況を聞く・話すことが依然として辛いことでもあるということも伺えた。

以上により、父親自身の心にひきこもりの問題に対する《認識変化への条件整備》がなされていた。

5. 《問題の再構築》

このカテゴリーは、＜家族の問題としての認識＞＜問題に向き合う覚悟＞の二つの概念からなる。

＜問題に向き合う覚悟＞は、認識変化の条件が整う中で、「先生のところでそういう現状を見て来て、これは逃げられる問題ではないということを認識しましたから…」と逃れられない問題として自覚し、さらに前向きに問題に向き合おうとすると決心する概念である。「私自身が『あっ』というかたちで、父親が入らなきゃだめだ…親がやっぱりその気にならないと駄目ですね。親の覚悟の程度です」と問題に向き合う親の覚悟が強調されていた。

＜家族の問題としての認識＞は、それまで、子どもに対する対応などと考えていたひきこもりの問題を、家族全体で考えていかなければならない問題と認識し始める概念である。「それで、その引きこもりというような社会現象が、こういうのがあるということを聞きましてね、それで参加してみようということで家内と相談しまして。」と語っているように、母親・父親の個別の対応の問題から家族の問題として《問題の再構築》を図っていることが伺えた。

問題の再構築がある程度図られることで、父親には《視野の拡大》が起こり、《外向き行動の拡大》など行動をとるようになっていった。

6. 《視野の拡大》

このカテゴリーは、＜子どもを見る視点の変化＞＜自己の態度の振り返り＞＜家族の気持ちの理解＞の3つの概念よりなる。

＜子どもを見る視点の変化＞は、それまで父親は問題を抱えている子どもという認識が強かったのであるが、子どもの強み、良いところも発見できるようになり、子どもに対する見方が変化してきていることを表す概念である。「それこそその人とのすごく信頼関係ができた、ああいうことには、（子どもは）そういう人をものすごく大事にするんですよ。・・・あんた（子ども）素晴らしい事しているんだね。」と語られているように、それまでの子どもを見る視点が変化してきた。

＜自己の態度の振り返り＞は、それまで、改めて自分の行動を考えることがあまりなかった父親が、自分の言動について振り返りができているという概念である。「もうおやじとはしゃべりたくない。そういうのも、今やっとなんか分かってきて、私が悪かった・・・。」など自分についても振り返っていた。

＜家族の気持ちの理解＞は、父親は自分を振り返るだけではなく、家族の気持ちにも理解が及ぶようになってきていることを表す概念である。「子供が一番切なかったんでしょうけどね」「（母親は）辛かったんでしょうけど、口には全然ださなかったですけどね。」など、子ども・母親に対して理解しようとするなど＜家族の気持ちの理解＞が進んでいた。《視野の拡大》は、父親に対し様々な気づきをもたらしている。

7. 《外向き行動の拡大》

このカテゴリーは、＜積極的行動の開始＞＜他家族への支援＞の2つの概念からなる。

＜積極的行動の開始＞は、それまでも、ひきこもりに関して情報を得ようとする行動は見られていたが、情報収集に積極的に力を入

れるようになったりすることを表す概念である。「とにかくどうしていいかわからない。専門家もいない。とにかく情報を集めるしかない。それと自分たちで話し合うと。」の語りから、問題に積極的に取り組む姿勢がみられる。

＜他家族への支援＞は、得られた情報などを、他の家族のために役立てようと考えたり、行動しようとすることを表す概念である。「だからその自分の子どもに関しての役立つ情報とか、そういうものを持って帰って欲しい、そのための親の会、でそれで、少しでもステップアップできる情報とかあれば。」と他家族のことを思っていた。

V 考察

本調査結果から、ひきこもりの子どもを持つ父親の認識変化、問題に向き合うプロセスが明らかになった。

1. 父親がひきこもりの問題に向き合うキーポイント

父親が、ひきこもりの問題に対する認識変化、問題に向き合うプロセスでのキーポイントは、ひきこもりの問題を自己を含めた家族の問題として再構築できるかという点であった。父親自身が、ひきこもる子どもに対する対応は母親の役割であると捉えている間は、自己を含めた家族の問題として捉えられてはいない。認識変化のための条件整備が整いつつある中で、父親が問題の再構築を図っていくために必要なことは、中垣内¹⁷⁾が、すべてのステップは、「無力さの自覚」から始まるとし、「なせばなる」と信じて取り組んだ結果がよい結果につながらなかったこと、逆効果となったことなどを自覚することであると述べているように、これまでの取り組み・結果を振り返り、ひきこもりの問題を家族の関係の中で捉え直し再構築してみるのではない

かと考えられる。

2. 問題の再構築と父親の苦悩

問題の再構築が図られた段階では、それ以前と比べて明らかに子どもを見る視点・家族をみる視点に変化していた。それまでひきこもる子どもを、問題のある子どもとして理解していたのに対し、子どもの強みを理解できたり、家族を思いやれるようになってきていた。

一般的に、ひきこもりの回復を考えた場合、弱み（欠点、問題）に焦点が当たることが多いが、その場合元に戻れるという強い思いが子どもの強みを見ることは難しくしていると考えられる。ひきこもる子どもの強みが見れている父親は、問題を再構築し、現実を受容してきているのであって、荻野¹⁸⁾も述べているように、元に戻るという希望を半ば捨て、（ひきこもる子どもの新たな生き方を）家族で支えていくという考え方が父親に生じてきていると思われる。これがひきこもりの問題に向き合うには重要なことであると思われるが、その考え方の転換そのものやそれまでの父親の苦悩を考えると、問題の再構築がなされつつある段階では特に父親の苦悩を十分汲み取っていくことが必要であると思われる。

3. 父親に対する支援の方向性

父親が母親と同じように、ひきこもる子どもに関わるのは難しい。またそれが良いわけではない。中垣内¹⁹⁾が、「父性」は主に父親によって担われ、「父性の不在」は、家庭内で父親的機能が不足する、「母性」は主に母親によって担われ、母親による必要以上の囲い込みによって子の社会性が妨げられると述べているように、母親には母親なりの関わり方があり、父親には父親なりの支援方法があると思われる。本研究では、父親の、親の会での役割の発見や他家族への支援など、外の社

会的関係における行動のあり方も見出された。三原²⁰⁾らが、知的障害者の父親の生活意識の調査研究の中で父親は、「外に社会的関係を求めている」と述べているが、ひきこもりの問題においても同じであり、父親には父親なりの支援のあり方があると思われる。中垣²¹⁾内は、周囲がその願望（当事者がひきこもりの状態から脱したい願望）に応えることができないまま（ひきこもる子どもが）放置された場合に、長期・高年齢・重症化が進むと述べている。父親がひきこもりの問題を再構築し、より早くひきこもりの問題に向き合えるように父親に合った支援をしていくことが、ひきこもりの子どもを長期化・高齢化させないためにも重要であると考えられる。

VI おわりに

本研究は、ひきこもっている子どもを抱え、親の会に継続的に参加あるいは関わっている父親という限られた条件の下における対象者に焦点を当てたものである。したがって、得られた知見もこの条件の範囲内で説明力があるものである。今後は、より条件を拡大し調査を進めていきたい。

謝辞

本研究を行うにあたり、研究者に体験を語ることについて快くご協力いただいたNPO法人全国ひきこもりKHJ親の会の皆様に深く感謝いたします。

なお、本研究は平成23年度～25年度科学研究費補助金基盤研究（C）（No.23593475）の助成を受けて行った。

引用文献

- 1) 川上憲人. こころの健康についての疫学調査に関する研究. 平成16～18年度厚生労働科学研究費補助金（こころの健康科学研究事業 主任研究者 川上憲人）.
- 2) 境泉洋、平川沙織、原田素美例. 「ひきこもり」の実態に関する報告書⑨－NPO法人全国引きこもりKHJ親の会における実態－. 2012;9.
- 3) 境泉洋、斎藤まさ子、本間恵美子ほか. 「ひきこもり」の実態に関する報告書⑩－NPO法人全国引きこもりKHJ親の会における実態－. 徳島大学大学院 臨床コミュニティ心理学研究室ほか製作. 2013;9.
- 4) 天谷真奈美、宮路文子、高橋万紀子. 社会的ひきこもり青年を抱える家族の困難さと支援ニーズに関する研究. 保健師ジャーナル. 2004;60(7):660-666.
- 5) 斎藤環. 社会的ひきこもり 終わらない思春期. 146東京:PHP選書;2009.
- 6) 竹内紀子. 療育機関に通う発達障害児を持つ母親のメンタルヘルス. 小児保健研究. 2000;59(1):89-95.
- 7) 小島未生、田中真理. 障害児の父親の育児行為に対する母親の認識と育児感情に関する調査研究. 特殊教育学研究. 2007;44(5):291-299.
- 8) 山岡祥子、中村真理. 高機能広汎性発達障害児・者をもつ親の気づきと障害認識－父と母との相違－. 特殊教育学研究. 2008;46(2):93-101.
- 9) 村上揚子. 障害児を持つ父親、母親の児への認識の差に関する研究. インターナショナル Nursing Care Research. 2012;11(1):1-11.
- 10) 三原博光、松本耕二. 知的障害者の父親の意識に対する考察. 発達障害研究. 2010;32(2):191-201.
- 11) 牛尾禮子. 重症心身障害のある子をもつ「高齢の父親」の養育態度と心情に関する研究. 日本重症心身症学会誌. 2010;35(1):131-136.
- 12) 畑哲信、前田香、阿蘇ゆうほか. 社会的ひきこもりの家族支援 家族教室の結果から. 精神

- 医学. 2004;46(7):691-699.
- 13) 斎藤まさ子、本間恵美子、真壁あさみほか.
高校・大学時でひきこもりとなった子どもをも
つ母親の体験－ひきこもり「親の会」参加する
まで－. 新潟青陵学会誌. 2013;5(3):21-29.
- 14) 斎藤まさ子、本間恵美子、真壁あさみほか.
ひきこもり親の会で母親が子どもとの新たな関
わり方を見出していくプロセス. 家族看護学研
究. 2013;19(1):12-22.
- 15) 船越明子、宮本有紀. ひきこもり青年抱える
家族へのサポートおよび家族の子どもへの心
理・態度の変容のプロセス. こころの健康.
2008;23(2):65-66.
- 16) 木下康人. M-GTAグラウンデッド・セオ
リー・アプローチの実践－質的研究への誘い
－. 東京:弘文堂;2003.
- 17) 中垣内正和. はじめてのひきこもり外来.
24. 東京:ハート出版;2008.
- 18) 荻野達史、川北稔、工藤宏司ほか. 「ひきこ
もり」への社会的アプローチ メディア・当
事者・支援活動. 168. 京都:ミネルヴァ書房;
2008.
- 19) 中垣内正和. はじめてのひきこもり外来.
43-44. 東京:ハート出版;2008.
- 20) 三原博光、松本耕二. 知的障害者の父親の意
識に対する考察. 発達障害研究. 2010;32(2):
191-201.
- 21) 中垣内正和、桑原秀樹、増沢菜生. 日本にお
ける「ひきこもり」の構造変化について. ア
ディクションと家族. 2013;29(3):236-243.